

令和2年度研究について

香川県小学校教育研究会国語部会

令和2年度研究主題

児童が自ら学ぶ国語科学習の展開（3年次）

－付けたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり－

1 研究の経緯

グローバル社会では、環境や経済、国際社会等、さまざまな分野で、複雑で世界規模の問題が一人一人に影響を与えていると言われている。こうした問題を解決しながら持続可能な社会をつくるためには、誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく、一人一人が考えや知識、知恵を持ち寄り、主体的に答えを導き出すことが求められている。つまり、「何を知っているか」だけでなく、それを使って「何ができるか」「どのように問題を解決できるか」が問われるようになってきている。そして、国語科においても、そのような力を付けていくことが求められている。

その中で、香川県の児童の実態を見てみると、平成27年～29年度に実施された全国学力・学習状況調査の質問紙調査における結果、「国語の勉強は好きですか」という質問に対して、肯定的に回答している児童は約53%にとどまっていた。好きではない理由の一つに、児童が、「国語の授業の中で、課題を自ら解決したい、課題に挑戦したい」と思えることが、まだまだ少ないことが挙げられるのではないかと考えた。国語の学習の中で、課題を解決していくことのおもしろさや楽しさを感じ、さらに自分の新たな課題を見出し、その解決に向かっていく児童を育成することが国語科の課題であると捉えた。

このようなことから、一人一人が、国語が好きだと感じ、自ら課題に向き合い、言葉による見方・考え方を働かせながら課題を解決する。そのようにしながら国語の力を伸ばし、さまざまな場面で生かそうとする児童を育てる国語の授業を目指すことが大切だと考え、平成30年度より研究主題を「児童が自ら学ぶ国語科学習の展開」と掲げ、研究を進めてきた。「児童が自ら学ぶ」姿とは、児童が、国語に対する関心を高め、言葉による見方・考え方を働かせながら、話したり聞いたり書いたり読んだりすることに没頭し、友達と協働しながら、課題の解決に向かっていく姿である。

これは、単に一単元、一単位時間の中で留まるものではない。単元内で、ある課題が解決された際に、その単元、その授業でどのような力が付いたのかを自覚し、さらに新たな課題を見付け、身に付いた力を生かしてその課題の解決に向かっていく児童を育成していきたいと考えたのである。そして、そのような児童の育成のためには、付けたい力を明確にし、その力につながる「関心」²を高めたり「自信」³をもたせたりすることが必要であると仮定し、それらに働きかける実践を積み重ねてきた。

¹ 言葉で話される話や文章を、言葉の意味や働き、使い方等の言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したり、その理解や表現について改めて言葉に着目して吟味すること（学習指導要領解説国語科編、154頁）

² 単元の始めや問題に直面した際に「相手に合った表現で話すことが大事だ」「その力を付けたい」等のような必要感や興味を、「関心」と定義している。

³ 課題設定の際には「こうすればできそうだ」という見通しをもって課題に取り組み、さらに、課題解決後には「身に付けた力を生かすことができた」等と達成感や満足感を味わうことで、「もっとやってみよう」と自ら学ぶぼうとする気持ちを「自信」と定義している。

2 これまでの研究の成果

平成 30 年度から 2 年間継続して研究を進めてきたが、その中で児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりするための働きかけとして、次のようなことが有効であることが明らかになってきた。

(1) 「関心」を高めること

付けたい力につながる「関心」を高める働きかけとしては、次の二つが有効であることが分かった。

- これまでにしてきた言語活動を振り返ることで「できること」と「できない」ことを明確にする。
- 今使える力を使って言語活動を試みる時間を設定することで、自分たちの課題を明確にする。

以下に、それらの働きかけを行った実践例を述べる。

○ これまでにしてきた言語活動を振り返ることで「できること」と「できない」ことを明確にする。

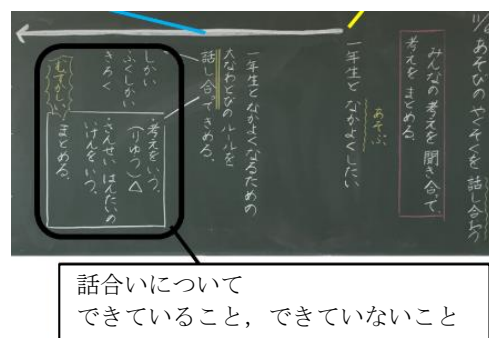
第 2 学年 「1 年生となかよくなるためのあそびのやくそくを話し合おう」

【付けたい力】

意見をつないで話し合いを進める中で、理由をつけて考えを述べたり、出た考えに対して意思表示をしたり質問をしたりしながら、似ている考えをまとめていく力

<働きかけと児童の様相>

- ・ 単元の導入にこれまでの自分たちの話し合いの様子を振り返る時間を設定し、「できること」や「できないこと」を明確にする。
- 話し合いの仕方できていなかった「賛成・反対の意見を言う」「質問をする」「理由を言う」「意見をまとめる」ことについて、「できるようになりたい」「やってみよう」という関心が高まっていった。



○ 今使える力を使って言語活動を試みる時間を設定することで、自分たちの課題を明確にする。

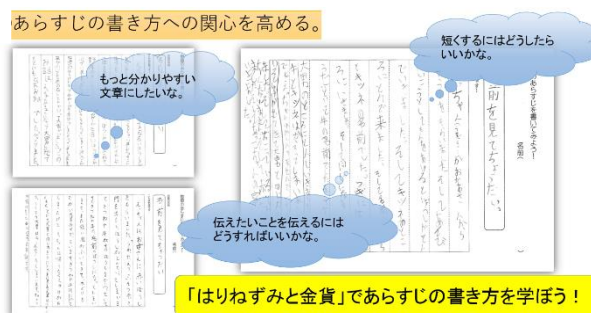
第 3 学年 「読書で旅しよう！ - はりねずみと金貨 -」

【付けたい力】

お気に入りの物語を読んで、中心となる語や文を見つけてあらすじをまとめる力

<働きかけと児童の様相>

- ・ これまでに学習している物語のあらすじを自分の力で書く時間を設定し、あらすじを書くことについての自分たちの課題を明確にする。
- 話の内容を詳しく伝えようとしたら、すべての内容を伝えようとしたら逆に伝わりにくい文章になってしまったことから、「短くて分かりやすいあらすじにしたい」という関心が高まっていった。



第6学年 「町の未来を描こう ―町の幸福論 コミュニティデザインを考える―」

【付きたい力】

資料の提示の仕方を工夫したり指示の仕方や視線について意識したりするなど、自分の考えが伝わるように表現の仕方を工夫する力

<働きかけと児童の様相>

- ・ ICT機器を使って、自分たちがプレゼンテーションする様子を撮影して、繰り返し見ることができるようにし、表現の仕方について、自分たちの課題を明確にする。

→ 表現の仕方によって、自分たちの伝えたいことが十分伝わらないと感じ、どのように表現を工夫すればより説得力があるものになるかと、「指示の仕方や視線などについて、よりよい表現の工夫を考えたい」という関心が高まっていった。



【ICT機器を使って繰り返し確認する】

このように、これまでにしてきた言語活動を振り返ることで「できること」と「できない」ことを明確にすることや、今使える力を使って本単元で行う言語活動を試みることで、自分の課題を明確にし、「これから自分に必要な力は何か」を児童に気付かせた。その結果、その力を付きたいという関心が高まったと考えられる。また、これらの「関心」を高める働きかけは、児童が課題解決をすることへの「自信」をもたせることにもつながっていった。

(2) 「自信」をもたせること

付きたい力につながる「自信」をもたせる働きかけとしては、次の三つが有効であると分かった。

- 付きたい力を使って、課題が解決できたという成功体験を繰り返し積むことができる単元構成にする。
- 付きたい力を使うための手助けとなる教具を使用する。
- 自分の成長を感じることができる振り返りをする。

以下に、それらの働きかけを行った実践例を述べる。

- 付きたい力を使って、課題が解決できたという成功体験を繰り返し積むことができる単元構成にする。

第1学年 「くちばしクイズをとこう」

【付きたい力】

説明されている事柄の順序を考えながら内容の大体を捉え、クイズに答えるために必要となる大事な語を本文中から見付ける力

<働きかけと児童の様相>

- ・ 同じ形式で作成された「くちばしクイズ」を繰り返し解いていくような単元構成の工夫をする。
- 捉えた内容の大体を基に本文を読み、クイズの答えとなる大事な語を本文から見付けることができたという成功体験を繰り返し積むことで、「自分で読めた」という自信が高まっていった。

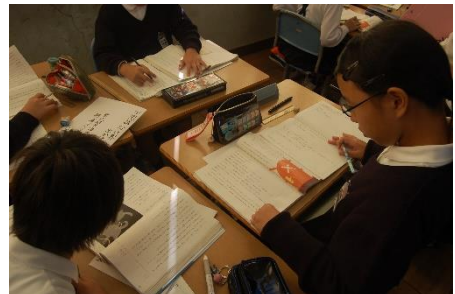
第5学年 「宮沢賢治さんから『物語づくりのコツ』を学ぼう ―注文の多い料理店―

【付けたい力】

物語の構成や表現の工夫を見付け、作品のよさを解説する力

＜働きかけと児童の様相＞

- ・ 学習する内容を、スモールステップになるように構成し、前時で学習したことを繰り返し使いながら課題解決できるようにする。
- 簡単な課題から解決できるようにすることで、「自分たちで課題解決できた」「前回に学習したことを使って今回も解決できた」という自信を高め、次の単元においても学習した構成や表現の工夫を使って物語を作ることができた。



【前時の学習を生かして課題解決を行う】

○ 付けたい力を使うための手助けとなる教具を使用する。

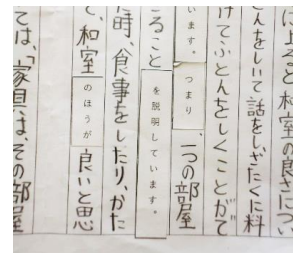
第4学年 「比べ方を知り、和と洋について調べたことを紹介しよう ―くらしの中の和と洋―

【付けたい力】

和と洋のそれぞれのよさを伝えるキーワードに見付け、それをヒントに内容を要約する力

＜働きかけと児童の様相＞

- ・ 要約や引用をする際にキーワードを短冊形のカードにまとめていき、単元の中でそのカードを使用し意識付けるようにする。
- これまでに見つけた和と洋のよさを説明するためのキーワードに着目し、その言葉を基に要約する活動をすることで、「前の時間と同じようにキーワードに着目して考えれば要約できそうだ」と自信をもって課題解決に取り組むことができた。



【キーワードを使って要約する】

第2学年 「宮西達也さんのお話の面白さを紹介し合おう ―ニャーゴ―

【付けたい力】

行動や会話を表す叙述を基に、登場人物の行動を具体的に想像する力

＜働きかけと児童の様相＞

- ・ 「同じ言葉」「よく似た言葉」など、どのような言葉を手がかりに考えると登場人物の行動が具体的に分かるかを短冊型のカードにして掲示しておき、使用する。
- 単元を通して何度もカードを見直すことで、どのような言葉を手がかりにすれば、登場人物の行動やそれに伴う気持ちを想像できるかが明確になり、自信をもって登場人物の行動を想像することができた。



【短冊カードを使って同じ言葉やよく似た言葉に着目させる】

○ 自分の成長を感じることができる振り返りをする。

第1学年 「くちばしクイズをとこう」

【付きたい力】

説明されている事柄の順序を考えながら内容の大体を捉え、クイズに答えるために必要となる大事な語を本文中から見付ける力

- ・ できたことが積み重なっているということを可視化できる振り返りカードを使用する。

→ 自分が「できた」ということが、毎時間の終わりに自覚でき、「もっと本を読んで他の動物のくちばしについて知りたい」とさまざまな本を読む意欲につながった。

	レベル1	レベル2	レベル3	ぞべし	ぞべし
レベル1	くちばし	★	★	★	★
レベル2	くちばし	★	★	★	★
レベル3	くちばし	★	★	★	★
ぞべし	?	★	★	★	★
ぞべし	?	★	★	★	★

【できたことが可視化できる
振り返りカード】

このように、付きたい力を使って、課題が解決できたという成功体験を繰り返し積み重ねることができる単元構成にしたり、付きたい力を単元内で繰り返し使うための手助けとなる教具を使用したりすること、さらには、自分の成長が実感できる振り返りをするすることで、付きたい力が身に付いてきたことを実感し、その力を使えば課題が解決できそうだと、付きたい力につながる自信が高まっていったと考えられる。

なお、第2学年「宮西達也さんのお話の面白さを紹介し合おうーニャーゴー」の実践では、児童たちは物語の中に複数回出てくる「ニャーゴ」という同じ言葉の意味に着目し、それぞれを比較していくことで、「同じ『ニャーゴ』という言葉でも、初めや途中の『ニャーゴ』は、食べてやるという気持ちが強かったけれど、最後の『ニャーゴ』は、その気持ちがなくなって感謝の気持ちが込められているんじゃないかな」というように、登場人物の行動やその言葉の中に込められている思いを捉え、その違いを具体的に想像していった。これは、言葉による見方・考え方を働かせながら課題を解決している姿の一例だと言える。この実践からも分かるように、自分が話したり聞いたりする言葉、書く言葉、読む言葉（叙述）の意味や働き、使い方にこだわりながら児童が自ら課題解決していく授業をこれからも大切にしていきたい。

2年をかけて、「児童が自ら学ぶ国語科学習」を目指し、付きたい力を明確にし、その力につながる「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする実践を積み重ねてきた。その中で、身に付けた力を生かして、児童が主体的に学びに向かう姿が見られてきた。また、令和元年度に行われた全国学力・学習状況調査の結果では、「国語の勉強は好きですか」という質問に肯定的に回答した児童の割合は、前回の調査（平成29年度）に比べて4.7%上昇した。さらに、「国語の授業の内容はよく分かりますか」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に肯定的に回答した児童の割合もそれぞれ、2.9%、3.2%上昇している。

これらのことから、付きたい力を明確にし、その力につながる児童の「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくりは、児童が主体的に国語の学習に取り組むことにつながっていると言えるだろう。

3 今年度の研究の重点と今後の方向

これまで述べてきた昨年度までの研究の成果を生かし、実態に応じて有効な働きかけを選択して行う中で、今年度も、付きたい力につながる「関心」を高めたり「自信」をもたせたりし、児童が単

元を終えても、学習してきた国語の力を、さまざまな場面で発揮しようとする姿を目指す。また、これまでに挙げてきた働きかけの他にも、「関心」を高めるために、単元のはじめなどで、これから付ける力が生活の中のどのようなところで生かすことができるかイメージをもたせたり、「自信」をもたせるために付けたい力について振り返るだけでなく、協働など、学び方についての視点で振り返ったりすることも考えられる。このように新たな働きかけについても探っていく。

加えて、その成果として児童の具体的な姿を見取っていく。その際には、文部科学省から出された「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」の中の「『主体的に学習に取り組む態度』の評価」が参考になるだろう。そこには、「主体的に学習に取り組む態度」は、次の二つの側面で評価することとされている。

- | |
|--|
| <p>① 「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面</p> <p>② ①の粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとする側面</p> |
|--|

これらを、国語科の単元に当てはめると、例えば「読むこと」を指導する単元では、第1次で立てた「主人公の気持ちの変化に気を付けて読み、感想を伝える」という単元の目標や、「気持ちが変わっている場面を見付けよう」などの一単位時間の学習課題の解決に向かって、「もっと他に気持ちが変わっているところはないかな」「この言葉からも〇〇の気持ちが伝わってくるんじゃないかな」などと、課題解決に向けて繰り返し考えたり「みんなで一緒に考えた物語だけでなく自分が選んだ物語にも主人公の気持ちが変わるところはないかな。見付けて友達に主人公の気持ちの変化について紹介しよう。」と付けた力を生かしそうとしたりする姿が①であると考えられる。

また、「書くこと」を指導する単元では、「感謝の気持ちを伝える手紙を書く」という単元の目標や、「感謝の気持ちが伝わる文の順番（構成）を考えよう」などの一単位時間の学習課題の解決に向かって、どのような順序で書けば相手に自分の気持ちがよく伝わる文章になるかと課題解決の方法を粘り強く考えたり、「文と文の続き方に気を付けて他の人にも感謝の気持ちを伝える手紙を書こう」などと付けた力を発揮しようとしたりする姿が①に当たると考えられる。その中で、「書きたい内容が決まったから、次の時間はどのような順で書けばよいか考えよう」と計画通り学習できているか振り返りながら、「計画では次の時間は実際の手紙用紙に清書することになっているけれど、付け足したい内容が増えたからもう少し構成について考えたい」などと必要に応じて学習の計画を変更したり、「自分で考えただけでは不安だから、次は友達にも見てもらって感謝の気持ちが伝わるか確かめてみよう」などと自分の課題解決過程を改善したりしようとしている姿が②と言えるだろう。この姿は、特にその時間の振り返りの時間に見られることが多いと考えられる。「本時できたこと」「次の時間に取り組みたいこと」やそれらの理由などを観点として振り返ることで見取っていけないかと考える。

このような二つの側面を基に授業の中で児童の姿を見取っていくことで、児童が自ら学ぶ姿の具体を探っていきたい。

<令和2年度の研究の重点>

- | |
|---|
| <p>○ これまでの研究の成果を生かしながら、付けたい力を明確にし、その力につながる、「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業実践を積む中で、単元構成や、授業の中での具体的な働きかけをさらに探る。</p> <p>○ 『主体的に学習に取り組む態度』の評価」を参考に、児童が自ら学ぶ姿を見取っていく。</p> |
|---|

参考文献

小学校学習指導要領解説国語編

国立教育政策研究所編「資質・能力〔理論編〕」，東洋館出版社，2016

鹿毛雅治著「子どもの姿に学ぶ教師『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』」，教育出版，2007

鹿毛雅治著「学習意欲の理論－動機づけの教育心理学」，金子書房，2013

桜井茂雄著「学習意欲の心理学－自ら学ぶ子どもを育てる」，誠信書房，1997

田村学著「授業を磨く」，東洋館出版社，2015

文部科学省「初等教育資料 5」，東洋館出版社，2017

文部科学省「初等教育資料 10」，東洋館出版社，2017

中村和弘編著「見方・考え方 国語科編」，東洋館出版社，2018

香川県教育センター「令和元年度 全国学力・学習状況調査 報告書」2019

文部科学省「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）2019

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1292163.htm